
陰陽師はじめました

ライトハウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽師はじめました

【Nコード】

N9305Z

【作者名】

ライトハウス

【あらすじ】

ごく普通の中学校に通う

進藤優斗は母の仏壇においてある

一枚の紙を見つけたとたんに意識がなくなり

倒れた。気が付くとそこは広い草原その世界は異世界と呼ばれているらしい。

そうここで陰陽師としての生活が始まる…

得体のしれない妖や魔物時には人間とも

戦っていく毎日に変わる。俺は札を使って

対抗していく…

果たしてなぜ優斗はこの世界につれてこられたのか？
非現実的ストーリーである

第一話 進藤優斗

「ただいま、つても誰もいねえか」

俺の名前は進藤優斗地元の中学校に通うごく普通の中学二年生だ。

俺は小6ころに母親を亡くしていて

今は父親との2人暮らしだ。と言っても

父親はほとんど家にはいなく

お金が置いてある。これでいつも夜ご飯をすましている。

昔は家に帰ればいつも母さんが料理を

作って待ってくれていた、母さんの料理は

どれも美味しく毎日が楽しみだった。

だけど今は…

とりあえず腹が減ったので

冷蔵庫を開けてみた、予想通りあるのは

牛乳、ビール、昨日コンビニで買った

食いかけの焼きそばしかなかった。

仕方なく今あるもので我慢した。

「いつからこんな生活になってしまったんだろうな」とつぶやいて
いると

自然と母さんの仏壇の前に足を進めていた。

母さんの写真を手にとり眺めていた。

「母さん…」写真を元の場所に戻そうとするとそこには紅蓮色に染
まっている

一つの紙が置いてあった。

今まで写真の裏にあり気づかなかったんだろうと思いその紙を手
にした瞬間、頭に強烈な痛みが走り俺はその場に倒れた。

気が付くとそこは見渡す限りの広い
草原だった。

「ここは何処だ…」と言ったその時

「ウウウグガア」と何かの唸り声が聞こえる

振り向くとそこにはこの世のものとは

とても思えないいびつな形をした

生物がいるではないか。

テストの平均点が24点の俺でも一目で危険だと分かるほどのオラだ。

「こいつは何だ…」俺は一目散に逃げた

だかその生物は想像以上に素早い。

「ダメだ、追いつかれる」どんどん距離が

近づいていく、死を覚悟したその瞬間

俺の手が赤く光り出す。

「何だこれは…」俺の手の中にはさっき仏壇の中で見つけた紅蓮色の紙がある。

化け物が近づくにつれて光りはどんどん強くなる、そして俺と化け物の距離が

一メートルほどになった時光りは

化け物を示しそして化け物は一瞬で燃え尽きた…

「何だこの紙は、そしてここは何処だあ？」

謎の少女「あいつ妖を倒しやがった…いったい何ものなんだ…それに陰陽師の札も

持っていやがるし、面白いやつだ」

第二話 異世界

俺はこの草原をひたすら歩いていた。
だが街など見つかりそうもなく俺は
一度休憩をする事にした。

「あの化け物はなんだったんだ…
そしてこの札はなぜ母さんの仏壇の中であつたんだ…」
今までの事を振り返っていると
後ろから声が聞こえた。

「またあの化け物か？」俺が身構えると
「そんなに警戒しないでよ！」

私は味方だよ」そこには俺と同じ年ぐらいの
少女が立っていた。

「君の戦いぶり見せてもらったよ。中々のもんじゃない、けどまだまだ使われていないようだね！」

そう言われた俺は疑問ばかりだ

「まずお前は誰だ、そしてここは何処だ
この札もあの化け物もいつたいなんなんだ？」

「人にものを尋ねる時はまず自分からって
言うじゃん（笑）」

「俺の名前は進藤優斗」

「わたしの名前は秋本光、そしてこの世界は

異世界

Another World、妖とそれを倒す者たちがいる世界よ」

俺は一瞬で分かった、さっきの化け物が
妖なんだと…

「この札は？」と俺が聞くと

「その話は歩きながらするわ、とりあえず
わたし達のアジトへ行きましょう」

俺は光の後を追って行った。

「まず何から話そうかな」

「この世界について教えてほしい」

「分かったわ。さっきもいった通りこの世界には妖と呼ばれる生物がいるの。」

そいつらはみただけで危険とわかるように

行動も危険なの、簡単に人を殺す

ような冷酷なやつなの…

そして私達はその妖を退治する

陰陽師なの。あなたが持っているその

札は陰陽師の札なの、どうしてあなたが

それを持っているかはわからないけど

それは妖を除去する働きが込められているの」

そっかだからあの時俺はあいつを倒せたんだ…

「この世界には陰陽師以外にも武闘派、

武器使いの2つのグループがあるわ

陰陽師も入れてこの3グループはどれも対立関係にあるの」

「どうして、仲間なら協力すればいいのに…」

「それは出来ないの…最初は協力していたの

だけである事に気付いたの」

「ある事…なに？」

「妖をたおすとその亡骸の上には秘宝が

置いてあるの…その秘宝は倒した人の使う

スタイルによって変わるの、例えば陰陽師が倒せば札が武闘派が倒

せば新たなスキルが

武器使いが倒せば特殊な武器が…

それを知ってからのはどのグループもその秘宝を狙った。そして気が
付けばグループどうしでの戦いも始まるようになったの」

「なんか複雑な話だな」

「うん、着いたわよ。ここが私達のアジトのある街ウィステラよ」

「なんて広い街なんだ……」俺は啞然とした
ままその街を見渡した

第三話 陰陽師はじめました

俺は啞然としたまま一步も動けなかった。
光とともに広い草原を抜け辿りついた街
“ウイステラ”それは想像を絶するほどの
素晴らしさだった…

「ねえ行こう？」俺に問いかけてきた光
俺が一步も動かないので不思議な顔を
していた。

「ううん」

ウイステラはとても賑やかな街だった
広場に着くと商人達の声、子供達のはしゃぎ声などが絶えず聞こえてきた。

「ここは賑やかな街だな」

異世界

「ウイステラはねAnother Worldの中で三大都市と呼ばれるほどの広さを誇っていて
一番平和で賑やかな街なんだよ？」

「そっか〜ところで陰陽師のアジトは何処にあるの？」

「ここだよ？」光の指の先には

三階だての少し古臭さを感じさせるが
がっしりと立っている建物あった

「ここがアジト…」俺は緊張し始めてきた
この先にいるのはきつと…

~~~~~優斗の想像~~~~~

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「死者よ安らかに眠れー？」

優斗「怖ええ〜」

~~~~~

陰陽師ってこんな感じだよな…

だけど光を見ていると俺の想像とは違うような気がする…

「なつなにジツと見てるのっ？もう行くよ？」

そういうと光は顔を真っ赤にして

中に入って行った。

「ちよつと待てよ？」俺も後を追いつ扉の前で

深呼吸をして扉を開けた

そこは俺の想像をぶち壊す世界だった…

「おゝいビールをくれ」

「おお新人かゝ宜しく」

「光おかえりなさい」

とても賑やかだった…

「どうしたの優斗？」俺は光の一言で

正気に戻った

「陰陽師ってこんなに賑やかだったんだな」

「そうだよ？陰陽師は仲間思いで賑やかなんだよ？それに比べ武闘派は一匹狼の集まる

冷酷な奴らなんだよ」光は感情を強めて言った

「陰陽師と武闘派の間に何かあったの？」

「うん、それはね…」すると光の声をさえぎるように低く太い声が光を呼んだ

「光、そしてその若僧こっちに来い」

「あつマスターだ」

「マスター？誰だそれは」俺は尋ねた

「各グループにはそのグループをまとめるマスターと呼ばれるリーダーがいるんだよ」

その話を聞きながらマスターの前に足を進めていた。

「おい若僧、お前の名はなんだ」

「進藤優斗」

「進藤か…（こいつなんだ…ただならないオーラを感じるぞ）ここにきたからには

覚悟はできているんだろうな」

「覚悟？」

「陰陽師となり妖と戦う勇氣はお前にはあるのか」

ここまで来たらならなきゃいけない
空気だな…「分かったよなってやるよ」

こうして俺の陰陽師生活が始まった

第三話 陰陽師はじめました（後書き）

第三話が終わりました！

ようやく陰陽師になりましたね…（笑

そこでここからもっともつと言い作品を作りたいと思つので意見、感想などを

聞かせていただけたら幸いです！

これから宜しくお願いします！

第四話 陰陽師は複雑だ…

陰陽師になるとは言ったものの
いったいなにをするんだろう…

と思い質問を試してみた！

「マスター俺はこれから何をしていけば
良いんだ？」

「簡単に言つと妖を倒す事だな」

……無理だ

「もう少し詳しく教えてくれ？」

「わかった、まず陰陽師には階級というものがある、下から見習い
陰陽師、下級陰陽師

中級陰陽師上級陰陽師、最上級陰陽師そして

マスター陰陽師だ。見習い陰陽師は修行をし試験を合格する事によ
り下級陰陽師に

昇格する事が出来る。進藤お前は今は見習い陰陽師だこの後に俺が
直々に修行をしてやろう」

「ありがとう…（俺はなにをされんだ）」

「マスター陰陽師に昇格する事により

一つのアジトを任せれるようになる。

階級ごとの違いについて教えよう

陰陽師は札を使う、使える札は階級によって違い階級があがること
により強い札が使えるようになる。そして妖の秘宝の札をつかえる
のは上級陰陽師からだ。階級をあげるには
毎年行われる階級対戦の結果により決まる」

「階級対戦？なんだそれは」

「階級対戦とは同じ階級どうしの陰陽師が
戦い一位をとれば次の階級の最下位の

陰陽師への挑戦権が与えられる。その戦いに勝てば昇格と同時に最

下位の陰陽師は降格このようにローテーションの仕組みとなっている」

「へえ、そっか（分かん…全く分かん）」

「よしこれで大まかな説明は終わりだ、

今から早速修行に行こうと思う

進藤いいな？」

「ああ、良いぜ」そう言うと

マスターは白色の札を出しその札を床に

投げ「印」と言ったと同時に俺はアジトから

あのほか広い草原にワープしていた。

俺は少し興奮していた、陰陽師になれば

こんな便利な事が出来るのかと感激していた

「進藤、準備はいいか」

「ああ良いぜ早速修行開始といこうか」

第四話 陰陽師は複雑だ…（後書き）

すいません少し複雑になってしまいました

階級対戦についてはもう一度

説明したいと思うので今回は許して下さい…

ついでに、少しでも面白いと思ってくれたならお気に入り登録してくれれば幸いです！

第五話 修行開始

俺は今、マスターと修行中だ？

「良いか進藤、もう知っているとは思うけど陰陽師は札を使って戦う

この札には三つ種類がある一つは攻撃的な札、二つ目は補助的な札最後は

妖の力が加わった秘宝の札だ」

「秘宝の札か…」

「まあお前にはまだ早い話だな。

それじゃあ少し使ってみようかな。ほらっ」

「これは札？これを使えばいいんだろ？」

「そうだ、使い方は…」マスターはそう言つと札を横にあった木に投げ「印」と唱えると

木は氷ついた…

「す…すげえ」俺にも出来るんだろうか…

「それじゃあ俺と同じく使ってみろ」

俺はさつきマスターが投げた木と同じ木に札を投げて「印」と唱えた…が札だけは少し燃えただけで氷ついた木には無反応だった…

「まだまだだなあそこに札だを大量に置いてある、お前の試験内容はあの木の氷を溶かす事だ言っておくがあの氷は

中級陰陽師でやっと溶かせれるレベルだからな」

「上等だぜえ…やってやるよ？」（ふざけんなまだ始め使っつていうのに無理だろう）

「じゃあ、頑張れよ」そう言つとマスターは消えていった

「ちくしょう…やるか…」

俺は札を一枚とり木に投げ「印」と唱えたが
変化は無かった…

「大変だね！」突如後ろから声が…

「誰だっ？光か、なにしにきた」

「応援しにきた？そういうえば優斗はもう一枚札を持っていたよね？」

「ああ、だけど妖を倒す時に

使ったからもう持っていないぞ」

そう言ったら光は俺に手を出したきた

「はい？」光の手の中にはあの時の札が
入っていた

「どうしてこれが…」

「あの後、妖の秘宝を取りにいったら

この札があつたの？普通の札は一度使うと
無くなるのになんであつたんだろうね？」

「ありがとう…そうだ？この札を使えば

あの氷を溶かす事が出来るんじゃないか？」

俺は、この札を木に投げ「印」と唱えた

すると氷はどこか木が燃え尽きた

「なんなんだ…この札強すぎる」

するとマスターがやってきた

「おおずいぶんと派手にやったな

（こいつ木ごとやるなんて…何者だ）

よし試験は合格だ、今日からお前は

下級陰陽師だ」

「よしや？やっと俺の陰陽師としての生活が始まるぜ？」

第六話 始めてのお買い物（笑）

「陰陽師になったのは良いけど俺はこれから何をしたらいいのか……」

俺は今、ウイステラの広場をあるいている下級陰陽師になったご褒美として

マスターから1万チップ（1円＝約1チップ）と赤色の札を5枚青色の札と5枚白色の札を5枚と電子マップを貰った。

「とりあえず1万チップもある事だから武器屋にでも行こうかな」

電子マップを頼りに店を探した。

「おっ！あつたぞ、早速入ろう」

「いらつしやい、最低限のものは揃ってるよ」

（メニュー）

・回復薬・毒直し・麻痺直し

（下級陰陽師から使用可能）

・赤の札・水の札・青の札・黄の札・紫の札

・風の札

（中級陰陽師から使用可能）

・火炎札・凍氷札・雷神札・水流札・風神札

・毒殺札

（上級陰陽師から使用可能）

・威力倍増銃

「へえー沢山あるんだな！この威力倍増銃って俺達陰陽師って使っていいのかよ？」

武器は武器使いのやつらが使っじゃ無いのか？」

「これは札を使う銃なんだぜ！

使い方はこの銃は手に付けて射つ取り付け型でイメージは大砲の小さい感じの

を手に付ける感じかな、受講は勿論小さいけどな！」

「威力倍増っていうのは？」

「ああ、この銃は札を沢山入れる事によって

そのぶんの威力を一気に放出する事が

出来るんだ。だがいれすぎると自分の

腕がぶち壊れるから上級陰陽師でも5枚が

最高だ、下級陰陽師は絶対に無理な話だな」

「面白い武器だな〜じゃあ何か買っていこうかな…この札は持ってないなよし？」

黄の札と紫の札と風の札を5枚ずつ」

「了解？ほらよっ？」

俺は店を出てまた広場をうろちよろしていた

「そうだ！さっき買った札の効果を

試してみよう？」俺は草原に向かった

第六話 始めてのお買い物（笑）（後書き）

ちなみに

- ・ 赤の札は火
 - ・ 青の札は氷
 - ・ 緑の札は風
 - ・ 黄の札は光
 - ・ 紫の札は毒
 - ・ 水の札は水
 - ・ 白の札は補助
- です？

第七話 戦闘（前書き）

現在の持ち物

・ 7000チップ・電子マップ

・ 赤、青、水、紫、黄、白、緑の札
各五枚ずつ

紅蓮の札

第七話 戦闘

「よしっ？到着」俺はあの草原に来ていた？
目的は勿論、札の効果を試すためだ？

「おっ？あそこにはいい的があるじゃないか
あれで試してみよう？」

俺は的にはちょうどいい茶色の的を見つけた
「よしっ？まずは赤の札」

俺は的をめがけ札を投げ「印」と唱えた
すると札は燃え火は広がっていく

「よしっやーすげー」と言っている
的が動き出した「……あれ？」

よく見るとそれは的ではなく魔物だった

「ああっ？そういうえばマスターが
言っていたような」

「進藤お前は下級陰陽師に昇格したよな？
そこで一つ言い忘れていた事がある」

「何だよ言い忘れていた事って？」

「この世界には妖だけではなく
魔物と呼ばれるモンスターがいるんだ

それは妖には到底およばない程の物から

妖と同レベルの魔物までいる。下級陰陽師のお前には少し危険な物
もいるから

気をつけてろ」

「了解」

「もしかしてこいつわ…魔物だあ？」

その魔物は外見は熊見たいだが頭に一本角が

あり俺と同じくらいの大きさだった

「グウ…ウガァー？」だいぶご立腹のようだ…

「ヤバイ…何でもいいから札を使おう？」

かばんから札を出し投げ「印」と唱えた

すると熊の火が消えて回復していく

ではないか…「補助の札投げてもうた？」

熊は元気になり角を向けて走って来た

「ヤバイ、ヤバイ…とりあえず投げろ」

そして俺は緑の札を投げた「印」すると

突如熊の周りに風が吹き熊は吹き飛ばされ
壁に体をうち気絶していた

「よっしゃー？今だ」俺は水の札とり投げ

「印」熊の上から大量の水が流れてきた

「今だ？」俺は黄の札を投げ「印」

すると熊の上に大量の雲が集まりだした

「これで終わりだあ？」雲から雷が落ち

水びたしの熊には効果抜群のようだ

「よしや？勝ったぜえ…」俺は疲れてその場
で倒れてしまった…

マスター「あいつがあそこまでやるとは
少しは頭も良いみたいだな…」

第八話 陰陽師VS武闘派VS武器使いVS妖 前半戦

「っはあゝよく寝た」

気が付くとそこはアジトのベッドの上だった

「やっと起きたかあ…かれこれ二日は寝ていたぞ」マスターが言った。

「そうだ、進藤お前にこれから試練を与える」

「何ですか？」

「ここから南にあるデフォー砂漠に

妖が現れた、今から行きそれを退治してほしい」

「俺が一人ですか？」無理…無理無理」

「お前は何もしなくてよい見学をしてこい

中級陰陽師を一人、上級陰陽師を一人

付けておくから問題は無いだろうそいつらはアジトの外で待っている少し勉強してこい」

「ここら辺かな」探していると

「優斗？」後ろから光の声が

「中級つてもしかして…光だったのか？
つてか光つて中級だったの？」

「言つてなかったっけ？そう私中級なの？」

「てつきり光は下級だと思つてた（笑）」

「ひどい」すると後ろからまた声が

「もう行くぞ…」

「あなたが上級陰陽師の人ですか…？」

「ああ、牙竜っていうよろしく」

「よろしくお願いします（かっこ良い…）」

「今回の妖は俺一人でやる、

光・優斗「わかりました」

そこまででかくは無いが石の塔など

「なあ光、他グループと戦うってどういう

「前にも言った通り妖は陰陽師だけでなく

妖が現れたらニグループは会う事になる

「戦わなきゃいけないって事だよ？」

「よしここから分かれるぞ俺は妖を探す」

いなくなっていた

「なかなか来ないな」眠りかけていた

「何だ、何だ？この爆撃は」

「来たわよ……武器使いの奴らが」

第九話 陰陽師VS武闘派VS武器使いVS妖 後半戦

俺たちは今、デフォー砂漠で戦闘中だ？

「武器使いめイキナリ爆弾投げてきたし危ねえだろ？」

「優斗下がってて…ここは私が行く」

「分かった。頑張れよ」

武器使い「何だよ、出てきたのは女か…」

ずいぶんとめられたもんだぜ」

「女だからって甘くみたら痛い目にあうよ」

武器使い「俺には時間がねえんだ

最初からとばしていくぜ？

いでよ妖の力をまといし迅速なる銃

“秘宝” 高速のバリスタス」

「あれは秘宝？」

「何だよ、あれは光教えてくれよ？」

「あれは、秘宝よ。秘宝は妖の力を

まとっているのその力は妖の力と瓜二つなのしかもその秘宝を使っている時は

武器だけでなくその人の能力も上がるの

だからきつとあいつも…いない？」

「俺の秘宝のポイントはスピード」

「光？後ろだ？」

「もう遅い？バァン、バァン」

「光？」

「大丈夫…優斗、お願い協力してほしい」

「分かったぜ？」俺はまず白の札を光に投げ

「印」そして回復させた

「待っているよ？この進藤優斗様がせいばいしてやる？」

赤の札をとり投げ「印」

「いけーファイアーボール」札は火の玉となりあいつ目掛けて進んでいった

武器使い「遅い」

「またいなくなつた？」

「優斗後ろだ？」

「ありがとう光？」

俺は緑の札を出した、そして俺のいる地面目掛けて投げ「印」と唱えた

風が吹き俺は吹き飛んだ

「風の勢いを使い逃げやがつた？」

「戦いはまだまだこれからだ？」

第九話 陰陽師VS武闘派VS武器使いVS妖 後半戦（後書き）

終わらなかったのだ

次に陰陽師VS武闘派VS武器使いVS妖

最終戦とします…

すいませんでした…

第十話 陰陽師VS武闘派VS武器使いVS妖 最終戦

俺はまだ戦闘中だぜえ？

「ちくしょー攻撃が全部あたらねえよ？」

「優斗、私も戦うよ？」

「光？もう怪我は良いのか？」

「だいぶ良いよ？それより私の札は

優斗のより一段レベルが上だからここからは

私がやるよ、そのかわりさっきの戦いを見てたら優斗、頭いいみたいだね？だから

命令をだして、その通りに戦うから」

「分かった（考える…考える…何かあるはずだ…あいつは音速…音ならこつちは光だ？）

光？何かあいつのの動きを止めれる程の光を発する札ないか？」

「あるよ？光輝の札？優斗目を閉じてね？

『印』」

武器使い「うわあ」

「光？今だそこから氷の札を使え？」

「分かったわあ凍氷の札『印』」

氷は武器使い目掛けて飛んできた。

「緑の札？『印』」俺は敵の後ろで唱えた

風で敵は氷目掛けて飛んで行く

「スピードが増すぶんダメージも増す

自分のスピードがまさかこんな裏目に出るとはな、いい戦いだつたぜ？」

「やっと終わったね？やつぱり

優斗は頭が良いよ？」

「いやあ〜それ程でも（笑）」

俺がデレデレしていると

後ろから声が「敵か？」

「牙竜だよ。終わったか？こっちは

無事終える事が出来た。」そう言い手には
威力倍増銃と見た事のない色の札があつた

「それが…秘宝？」

「ああそうだ…」凄い…あの札は他のとは
違う何かを感じる…そうだこの札も

そう思い俺は紅蓮色の札をだした

「この札はいつたい…何なんだ」

帰ったらマスターに聞いてみよう。

よしとりあえず帰ろう？

第十話 陰陽師VS武闘派VS武器使いVS妖 最終戦（後書き）

十話が終わりました？

ここからもうといい作品を作りたいので

感想、要望などをお願いします

そしてお気に入り登録お願いします

第十一話 ついに階級対戦開始？

「ついた」俺は砂漠での戦闘を終え
アジトの前まで帰って来ていた

「とりあえずマスターの所にいこう！」

俺は中に入りマスターの所まで行った

「お疲れ、無事終える事が出来たんだな
どうだった上手く戦えたか？」

「ああ戦えたよ！それよりこの札なんだ
けど…」俺はそおいい紅蓮の札をだした

「見た事のない種類の札だな」

秘宝の札とも少し違うような、だけど
何か凄いオーラが感じられるよ」

「そうですか…マスターにもわかんない
なんて、いったい何んなだろう」

「そうだ、進藤、お前に伝えなきゃならない事があったな。
」
「なんですか？」

「お前達がない時に決まったんだが
二週間後に階級対戦の開催が決まった」

「っえゝそんな、俺こっちに来てまだ一週間もたってないよぉ？や
つと札の使い方覚えたレベルだしどうすんの」

「慌てるな？だからお前には特別に
先生を付けてやるよ？」

「誰、ですか？」

「お前には牙竜が直々に特訓してくれるよ」

「まっマジですか？めっちゃ嬉しいよ？」

「良いんですか牙竜さん？」隣にいた牙竜さんに聞いてみた

「ああ俺でよければ教えてやるよ」

よしっ驚異的な進化で最強になってやる？

つと誓った優斗であった

第十一話 ついに階級対戦開始？（後書き）

次回は修行の様子をのせたいと思います

第十二話　こんな修行で大丈夫？

強くなると誓ってから早くも

一週間がたち俺は不安になってきた…

この一週間ずっと俺は折り紙を折っている…

「あのー牙竜さん、こんな事をして

ほんとうに強くなるですか？」そういう

俺の横には千羽鶴ならぬ一万鶴ぐらいの

鶴がある…

「もう良いかな…よしっ札を使ってみろ」

「え？札ですか？分かりました」そお言い

俺は緑の札をだし「印」と唱えた

するとどういふ事だ前までの風とは

全然違うこれは台風並のスケールでは無いが

「えっ？何で？何でこんな凄い事になってるの？」俺の頭の中は？

マークだらけだ

「進藤、お前に足りないのは一つの物に

集中する力が足りなかったんだ

だからこの一週間ひたすら折り紙に集中

してもらったんだ」

「だからずっと俺はこんな事をしてたのか」

「ここからはお前にある事を教えよう

どの陰陽師も必ず得意な札の種類ってのが

あるんだよ。ちなみに俺は氷、お前にも

あると思う。今まで見てきたところ

お前は多分火だ」

「俺の得意なのは火なのか…」

「ここはから得意技に磨きをかけていく

あとお前が持っているその特別な札」

「紅蓮の札の事ですか？」

「それ今使えるか？」

「俺はそう言われ『印』」と唱えただが
何も起こらない…

「あれ？おかしいな…」俺は何度も試したが
結果は同じだ…

「やつぱりな…進藤、お前はそれを
扱えてない、それを扱う事が出来れば
お前にとって凄い武器になる、だから
今回の修行では得意技と紅蓮の札を中心に
修行をしていく？」

「じゃあ早速やりましょう？」

俺の最強への修行が始まったそして…

~~~~~一週間後~~~~~

「進藤優斗改、参上？」

### 第十三話 進藤優斗“改”

「進藤優斗改、参上？」

「優斗？久しぶり？」そこには光りがいた

「おう？久しぶり？」

「修行の成果がでるといいね？」

「うん」すると中央からマスターの声が

「ええつと…そろそろ始めようかな

ただいまより第…第何回だっけ？」

「……」

「まあいい今年度の階級対戦を開催する？」

陰陽師達「おお？」

「おおまかな説明をする

トーナメント戦の四回戦となっているそして

その四回を勝った勝者が次の階級への

挑戦権を獲得できる、逆に最下位決定戦も

あるのでそこを心得てください

下級陰陽師は一階へ、中級陰陽師は二階へ

移動してください、そこに対戦表も

あるので」

「ええつと俺は最初じゃねえか？」

相手は富士谷葵ねえ今から十分後かあ

とりあえず、札の整理でもして時間潰すか」

~~~~~十分後~~~~~

「ええつと今から富士谷葵と進藤優斗の

試合を始める、勝敗の決定は降参するか

試合が出来ない状態になるかだ、
準備はいいか？」

富士谷「はい…宜しですよ」

俺「いいぜ（何だよ相手は

メガネさんかよ（笑）これじゃあ速攻で

終わるな周りには透明のバリアが

あるみたいだし思う存分に戦えるぜ」

「それじゃあ始め」

「紅蓮の札あ？『印』」俺の周りには龍の形をした火よりはマグマ
的なものが

集まりだした…

「炎龍の暴走」

富士谷「うっ…うわあ？」

「おととい来やがれ？」

「ええそこまで…勝者進藤」

陰陽師達「なあなんだよあの新人強すぎるよ？」

「見んな俺に向かつて言ってくれてるんだなそんなに言ったら照れ
るじゃないかよ」

優斗はそう言い周りを見ると

皆の視線は別会場を見ている

優斗「なっ…何があっただよあそこには」

となりの会場は跡形もなくなっていた

ただそこには一人の少年が立っていた

「誰だよあいつ…俺の英雄伝説があ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305z/>

陰陽師はじめました

2012年1月1日22時45分発行